

学 会 報 告

平成 18 年度日本水産学会大会

高橋 祐一郎

日本水産学会^{*1}の平成 18 年度大会は、高知大学を会場として、2006 年 3 月 29 日（水）～4 月 2 日（日）の日程で開催された^{*2}。

同学会は、会員数五千人を超える日本最大の水産系の学会である。年 1 回の大会には、日本全国のみならず海外からも、延べ千人を超える会員が、水産に関する最新の研究成果やタイムリーな情報を求めて集まってくる。例年であれば卒業式を終えて静かなキャンパスは、同学会の大会会場になると雰囲気は一転し、胸に名札をぶら下げた大会参加者で溢れる。発表会場はもちろんのこと、食堂や休憩室は常に混雑し、夕方以降は引き続き近辺の飲食店に場を移してまで熱い議論が交わされる。同学会の大会は、水産研究者にとって、春の訪れを感じる風物詩でもある。

今回の高知大学の大会会場は、人文学部、教育学部、理学部が設置されている朝倉キャンパスであった。同大学で水産学を学ぶことのできる栽培漁業学科のある農学部のキャンパスは、ここから車で 30 分ほどの南国市に位置している。また、高知大学での同学会大会の開催は実に二十数年ぶりのことである。このため、私を含め、多くの参加者は会場の土を初めて踏んだようである。

本大会初日の 4 月 29 日は、理事会、評議員会のほか、五つのシンポジウムが開催された。大会の際に開催されるシンポジウムは、例年、極めて専門的な分野について開催される傾向がある。しかし、本大会では、「21 世紀における国際学術交流」「水産学と日本水産学会の未来 Part-1」といった、いわば大局的なテーマのシンポジウムも開催された。この二つのシンポジウムは、参加者の注目を浴びていたようで、その翌日以降、大会会場の休憩室や食堂などで、それぞれの会場の雰

囲気や、水産研究の大御所が提供した話題の内容などについて語り合っている光景が目についた。

4 月 30 日から 5 月 1 日までは、本大会のメインである口頭報告が開催された。今回の報告件数は 750 件を超え、ポスターセッションを含めて 14 の発表会場が設置された。かのように報告数の多い本大会の講演要旨集は、例年大きく重いものとなり、今回は、A4 版で厚さ 2 センチメートル、重さ 1 キログラムを超える代物であった。加えて、1 ページに 4 題の講演要旨が縮小して載せられているため、プレゼンのために暗くされた会場の中では、読むのにも一苦勞である。しかし、この冊子は、水産研究の最新の成果が満遍なく収録されている貴重な資料集である。報告の合間などにこれを眺めているだけで、かつての同僚や知人が今どのような研究をしているのかを知ることができたり、自分の研究に役立つ知見がはからずも見つかったりする。研究のヒントを得るうえで非常に有意義である。ところが、来年度の大会では、講演要旨は原則として CD-ROM 化する計画があるという。経費の節減などが理由とのことで致し方ないが、もし冊子が残るのであれば、たとえ別途有償化されたとしても、私は求めずにいられないだろう。

※ 1 日本水産学会の URL（トップページ）は次のとおり。

<http://www.soc.nii.ac.jp/jsfs/>

※ 2 本大会のプログラム等は以下の URL に掲載。

<http://secure1.gakkai-web.net/gakkai/jsfs/kaikoku/index.html>